WASON
HQ
1104
J74+

Apr 20
1889
no. 158

女學雜誌

一冊六錢

當府内無郵税

版權所有

各土曜日出版

明治廿二年(第百五拾八號)四月二十日發

社説

滿目淡々(日本社界の一大弊源)

論説

女子の文學(池袋清風)○鶴龜松竹梅(鈴木弘恭)

批評

紅葉山人の「色懺悔」(藤の屋)

叢話

男女相知らず○過去語(其二)(高橋おろか)○絶唱○旅のはじ(むらさき戯稿)

佳傳

パンセアの傳

小説

理想の紳士第十二回(月の舎しのぶ)

新報

高等女學校行啓○愛情論○渡邊洪基君○浮雲さ癡れ卵子○敢て女學記者に教を乞ふ○老孃會○一夫多妻○養育院慈善會○東京女學校○高等女學校○産婆正副會長○女雇人の數○頌榮女學校○海軍武官女子教育會館○大垣遊廓地○函館女子職業學校○日本赤十字社委員長及副長

外報

デュマーク○ハワイ○ヂルクを退けし人○ルーマニアの女王

附錄

女子讀本○婚姻説

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 158. April 20th, 1889.

EDITORIAL :—The Great Source of Evil in Japanese Society.

LEADING ARTICLES :—Woman's Literature. (Mr. K. Ikebukuro.)

Salutatory. (Mr. H. Suzuki.)

CRITICAL NOTES:—"Iro-Zange."

MISCELLANIESS :—"Women do not know Men and Vice Versa."

"Reminiscences." "Literary Gems." "Disgraces of a Journey."

BIOGRAPHIES:—Panthea.

NOVELS :—"The Ideal Beau."

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

女學雜誌は日本の女性を代表す、日本の女性は女學雜誌の如くあり、亦如くなるべし、亦如くならんことを望む。日本の女性を知らんと欲せば女學雜誌を見よ、之に知られんと欲せば先づ女學雜誌に知られよ。女學雜誌は日本婦人の分身にして、亦た其の教師、案內者、相談相手たるなり。

●珊瑚の珠

○事實の異解

事實と解釋とは必す二箇に區別せざる可らず古來解釋を寄しんで之を事實に及ぼすものあるは正當の見識にあらざるなり此故にハムボルトの賢なるも荒比亞の三角塔を見て之を天然物となせり。むかしアルプスの高嶺に貝類の砂中に埋れ居たるを見出せしとき世人は種々の臆測を爲して之が解說を試みたり或は以てノアの洪水に歸し又或は造化の戯謔に歸するものあり就中ヴォルテールの賢なるも尙ほ一個の奇說を爲して言へらく往古より諸國の人民は多くエルザレム聖城に參詣するの風ありしが其うちにはアルプスの嶺を踰ゆるものも多かりき彼等は帽子に種々の貝を佩び居たりしゆえ恐くは之を山間に遺失して去れるならんとアルプスの山中に發見せる貝をして僅々數十百個ならしめば此說或は然らん然れども或所には其量夥多にして殆ど丘を爲すに至れるを以て見れば此說の穩當ならざること論を待たず近來地質學大に開け數万年の昔時今の歐洲全土は一面の海なりしと云ふこと明かになれるより世人漸くにして其惑を氷釋するを得たり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百五十八號　明治二十二年四月二十日發兌

社説

○滿目漠々、
日本社界の一大弊源。

大道廢れて仁義あり、智慧出でゝ大僞あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠臣あり、大道若し茲に廢れずんば仁義起らず、智慧若し茲に出でずんば大僞現われず、六親若し茲に和せざるとなくんば孝慈生らず、國家若し茲に昏亂するとなくんば忠臣立たず。故に仁義智慧孝慈忠臣の現出するは國家の幸福にあらざる也。

二千五百年前に老子は如此く放言したり、而して今に於て尚ほ此の如く言ふものあらば吾人は深く妄誕不稽の去りがたきとを慨歎すべし。苟しくも若し黄金世界は過去に消滅したるものにあらずして當に將來に存在すべきものたるを信じ、理想の天國はユフレート河邊に亡失したるものにあらずして必らず來世に現出すべきものたるを信じ、宇宙の大法は只だ沈滯するにあらず無爲なるにあらず實に怒號戰闘の間だに惡より善に進化するものたるを信ぜば、社會に仁義智慧孝慈忠臣の起り來るは決して奇しむべきにあらず、否な奇しむべきにあらざるのみあらず實に然らざるを得ざる也。蓋し大道は未だ嘗て現はれ了せざるあり故に仁義は之を顯わすの先導となる、大僞は未だ嘗て滅し了せざるなり故に智慧は之を破るの燈明となる、六親は未だ嘗て圓滿に和せざるなり故に孝慈は之を結ぶの鍵となる、國家は未だ嘗て完全せず故に未だ嘗て昏亂なき能わざるなり忠臣は則はち之を善化するの藥劑となる。左らば仁義智慧孝慈忠臣は社會の卒先者なり、先導者なり、覺醒者なり、暗黒場裏に照れる唯一の光明あり、渾沌亂裡に成れる最始のヲノコロジマなり、濛々たる下天を提ぐる最高最登の天路巡禮者なり。若し樹木の成長するとを知らば安んぞ其の木芽あるを奇しまん、若し社會の進化するとを知らば安んぞ進化に前驅あるを奇しまん。

故に吾人は今の十九世紀に於て、特に始めて改進の舞台に登りたる此の新日本に於て、必らずしも敢て老子の放言を操反して自から高しとするものにあらず、然りと雖ども今の日本社界を望めば滿目漠々たり、端なく老子の歎辭に思ひ到らずんばあらず。

蓋し仁義の人、智慈ある者、子の孝なる者、父の慈ある者、臣の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

忠なるものあるは、實に社會の大幸なり、然れども只だ仁義智慧孝慈忠臣の稱名議論あるは轉た丶社會の爲に歎ぜざる可らず。今や我日本國には果して其人ありや吾人は之を見ると甚はだ少なし、而して其の稱名議論あるを見るや極めて多し、之れ未だ我國の幸福にあらず、日本社界一大弊源の存する所ろ大率ね之に由て察知すべし。

抑そも健全なるものは其の健全なるとを知らず、只だ病ひあるもの能く健全を知る。少壯快活の時思ふに樂しみや極まりたり、故に其の樂しめるものは其の樂しみあるとを知らず、只だ憂ひある者能く樂しみを知る。大凡そ人の健全を知るや其の之を知る時は即はち其の健全ならざるの時、其の樂しみを覺ゆるや其の之を覺ゆる時は即はち其の樂しまざるの時なり、古人故に云く智慧の木は惡の根より生じて善惡の木の實を結べり、アダム若しパラダイス(樂園)に殘りしならば世に生理學も哲學も起らざりしならんと。

左れば天才は其の天才あるとを知らざるなり但だ天才なきの人に於て初めて之を知る、英雄は其の英雄あるとを知らざるあり但だ英雄ならざるの人に於て之を知る、仁者は其仁者たるとを知らず右の手の施す所ろは左の手だに知らざるなり、但だ仁者ならざるの人に於て之を知る、學者は其學者たるとを知らず卒然として動かされ夢の如く歌ふ、但だ學者ならざるの人に於て之を知る。古來レトリックと文章軌範とに由りて幾千の名文章を得たる、算術と統計學とに由りて幾千の學士を得たる、倫理學と説法とに由りて幾千の仁者を得たる、慷慨と正氣の歌とに由て幾千の英雄を得たる、吾人は未だ甚だ多く其産出する處ろを見ざるなり。人は肉と心と靈とを所有す、故に肉に關するの生理學は豈に夫れ無用ならんや、心に關するの心理學亦豈に無用ならんや、然りと雖ども遂に其の靈に屬するの最大理に及ばざるや明らけし、肉は猶は衣もの如し、心は尙ほ身躰の如し、靈は是れ聖所の聖所、秘極の秘極、万の最大なる能力之より發す、故に肉躰心意の事亦肉より重んずべしと云へども其の尤も重んずべきは則はち靈の事あり、左らば學問議論研窮分析の業豈に無用ならんや、只だ妙怪不思議之を析つ可らず窮む可らざるの靈の尤も多く有用なるに及かず、故に靈に加へて肉心を考へば可なり、若し夫れ只だ肉心あるを知つて靈あるを思ざるか如此きは未だ悉とく人間に適用す可らざるの見識とあるべし。生理心學者は靈を解剖せんとせり、惣ての理學者は惣ての無形物を有形にせんとせり、

吾人は未だ其の勞の果して徒勞なるや否やを知らず、思ふに彼等と云へども亦決して之を知らざるべし、只だ夫れ其の未だ研究し了せざるに當ては吾人は如此く斷言せざる可らず、云く人の心奥に一種の靈海あり、理學によりて未だ分つことを得ず、尺度によりて未だ測ることを得ず、人に由りて未だ見ることを得ず、躬からに由りて未だ辨ずることを得ず、忽焉として起り忽焉として消ゆ、恰かも大天地に識りがたきの創造ありし如く一身の小天地にも亦不可思議の創造あり、之よりして頓はかに英雄を出し學者を出し仁人を出し智者を出す而して英雄學者仁人智者は自から其の由る所を知らず亦た其の現はるゝ所を見ざる也。ヘブンは之を腦理の自動調合と云へり、カライルは之を不覺界の大覺と云へり、吾人は其の何れの可なるやを知らず、但だ實見するに實に如此きものあり、眞成の仁義智慧孝慈忠臣の出で來る所は常に如此しと云ふ耳。

而して今の日本社界を見れば、何んぞ夫れ仁義智慧孝慈忠臣の稱名議論ありて、反つて其の自覺することなくして然るの仁人義士智者孝子慈父忠臣の少なきぞや、見よ切りに英雄を氣取り吾こそは東洋の豪傑なりと言わぬ計りの人物は至つて多し、又吾こそは西洋風の政事家なりと自稱せらるゝもの、吾こそはエライ文學者だと云はるゝもの、吾こそは高尙の哲學者なりと云はるゝもの、吾こそは完全無欠の義人なりと云はるゝもの、蓋し如此き人物は實に輸出したき程に多し、然れども彼等が御自身に於て其の英雄たり仁者たることを承知せらるゝと共に、之に依りて吾人は其の氣の毒ながら仁者にもあらず英雄にもあらざることを知る也。又見よ、今の日本には何んぞ議論の多きや、道德の根底は此れなり否彼なりと云ひ、眞の政事は彼なり否な之れなりと云ひ、議論百出して實際に未だ一大業を見ず、夫れ議論は大切のものなり然れども最大切のものにあらず、議論の目的は議論するにあらず只だ知らんことを欲し信ぜんことを欲するにあり、而して今の日本人は一の確たる信仰を有せず、否な之を有せんともせず、只だ議論に議論を重ね、空論に空論を積み、彼のアテンス人の如く徒らに新らしきを知らんとのみモガクなり、而して未だ嘗て確定したる大丈夫なる實行あらず。

愚者は爭はず、智者は爭ふ、然れども大智は爭はざる也、原人に議論なし、中世に論難あり、然れども末代には顏を合せて見るが如く明理あらん。蓋し世は無爲の時代より戰國を通して終極の太平に入り、理なきの一致より理あるの議論を通

して遂に有理の一致に入るものなり、左れば今の日本に議論多きは決して悲しむべきにあらず、自から氣取るもの〻多き亦必らずしも惡むべきにあらず、然れども之れ決して安心すべきにあらず、未だ帶を解いて宿泊すべき陣所にあらず、當に一進行を要すべきの旅中尤も嶮岨山多きの處ろ也とす。

夢みると夢みる時は將に夢の破れんとする時なり、吾人は實に我が邦人の時弊に注意せんことを乞ふもの也。見られよ、今の日本は唯物的の時代に存するにあらざるなきか、動物的の慾中に沒するにあらざるなきか、懷疑的の論谷に埋もる〻にあらざるなきか、輕率浮薄絶へて一の斷守すべきものなく、飄々として飛び、浮足になりて走り、積まずして大洋に流る〻の危險に存在するとはなきか。

一言するに、今の日本には自から知らずして而も絶大の偉人たる眞の英雄風なきあり、止むなくして起ち思はずして至り知らずして決行する純正の政治家風なきあり、直覺して悟り確信して得謙遜にして端なく大哲理を見る眞成の學者風なきあり、卒然として自然に感じ天來の火顚に燃立つ所謂るインスピレーション的の文學者風あらざる也、而して其の仁を爲すものに至ては特に甚はだし、徒たに喇叭を吹き、會堂に念佛祈禱し、悲しき聲、冷たき涙、親切らしき慰めを以て仁を製造するもの、若くは仁を爲して之を廣告し、其の跡を賞牌に止め置き、從何位に肩書し、たゞ算盤的に其の報ひを受けんとする道德の貿易者多きなり。

左れば今の日本に尤も必要する所ろのものは直覺なり、それ只だ直覺なるが故に尤も信仰を必要とするなり」。誰か科學に由て大哲理を發明したりと云ふ、古來の最大發明は多くは想像に據れり、地球の圓きとも引力あるとも、海王星を發見したるとも血液運行を撿知したるとも勢力保存微分子存在の事を確かめたるとも、若し夫れコロンバスが新世界を發見したるともダーヰンが進化論を大成したるとも、悉とく先づ想像の直覺したるに因づく、吾人は實に科學を尊とむもの也故に夢にだも科學が大發明を爲さずと云ふものにあらず、然れども直覺が大發見を爲さずと云ふものあるに至つては實に其の妄見を笑はざる可らず、蓋し之を確かむるは科學ならん、之を證するも亦た科學ならん、之れを配合し之を調理し之を解釋するも亦た科學ならん、然れども卒先し卓出し自由の自由に乘じて倐忽、大哲理を發見するは實に直覺にてあるなり、蜂は辛苦して計り、林鳥は百啄す、但だ彼の蛺蝶は飛來飛去

して滯うるとなし、但だ彼の雲雀は高く飛んで天空に登る、徒らに肉あるを知り論事矩あるを知り營々として泥に附して議論するもの、實に哀れなる哉。」然りと雖ども直覺は忘想と異なる、妄想は自から思ふ也、直覺は他より與へらるゝ也、直覺は外より來る忘想は内より發す、即はち直覺は上より天より來り妄想は下より肉より發するもの也、此に於てか直覺の信仰より發するを知る、信仰は上を望むもの天を望むもの吾以外に一大物の存するを信ずる者也、故に眞の直覺は信仰より來り信仰の尤も純清なるもの初めて純清の直覺を生ず。然らば我國に自然なる誠實なる眞の仁者英雄學者政事家文人を出さんとを希ねがふものは、先づ今の日本に「直覺」の空氣極めて稀薄なるとに注意し、之に注意すると同時に「信仰」の念の必らず起らざる可らざるとを記臆すべし。蓋し信なきものは風に撼かされて翻へる海の浪の如し、斯の如き人は貳心にして其行ふ所の事すべて定準あらず、然るに彼の山をも移すものは信仰なり、百挫千困に堪へ得るものは信仰なり、着々として改進し漸次に然し乍ら迅速に改進し敢て絶望せず敢て虛無に憋せざるものは信仰なり、理想を確望し幽玄を實識し進化の大法を堅認し敢て騷ず敢て浮かず敢て落膽せず敢て怠らず「唯是也」として勇進するものは信仰なり。吾人豈に吾人が信ずる所ろの信仰の如くなれと云はんや、只だ何に致せ一つの信あれよと云ふのみ、而して日本各人民今ま果して一の信仰と稱すべきものを有するある乎。

ルーテル曰く、信仰の尤も堅きものは女性なりと。バックル曰く、演繹し直覺し信認するの尤も多かりしは女性なり、故に古來智識の無味に化するを防止したるは一に女性の功なりと。蓋し世の文明に着目し、國家の開進に掛念し、特に我日本國現時の景勢に慨歎するものは、須らく女子敎育に對する更に一個の別眼あるべき也。

論說

左は去月三十日大阪梅花女學校内麗文會より池袋清風君を招聘し一場の演説を乞ひたりしが同君は多用を以て辭せられし故其演説の草稿を乞ひ金森通倫氏をして朗讀せしめたる者なり然るに閉會の時に臨みて同會特別會員本間重慶氏立て輕忽にも池袋君の演説を一言の下に蹴離し去られたり余は當時其席に列し親しく池袋君の演舌を聽き亦本間氏の駁論を聞き其駁論の甚だ不當無禮なるを感したるの餘直に立て池袋君の爲に辯解し併せて聽衆をして同君の眞意を悟らしめんとせしも事の輕擧ならんとを恐れて止みたり爾後今日に至るまで熟思するも更に駁論の意を解する能はず故に左に池袋君の演説草稿及び本間氏駁論の大意を貴社に寄せ以て江湖の諸君子淑女に質疑す

在京都同志社　志垣要三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○女子の文學

池袋清風述

今男子の生徒と女生徒と英學に於て同等の智識を得ましたとしても惜しひ事には女生徒の之を實用する區域は男生徒の半分も顯はれませぬ成程學識を得た効力は男生徒に一歩も讓らぬかしれませぬが外に顯はれませぬから何か臨ひやうです例へば男子なら都會の大會堂にでも立て昨夜得た學識を今朝は滔々と演説に顯はし數千の聽衆を驚かす事も出來又說敎して數百人を一時に感服せしむる事も出來ます或は宦途に出或は國會議員となり又農工商に働くとも出來廣く世人と交際して其學識を活用させ益進歩させます是とかはりて女生徒はいか程學識が溢れても世人に對して己の思想を演舌する事も出來ませぬ牧師傳道者となりて說敎する譯にも參りませぬ又官員や議員ともなられず農工商の大事業をなす事も出來ませぬ成程卒業後は敎員となる人も有りますが大概女學校のみに務めおさりますから其區域が狹くて何百人の女生徒が皆敎員になる譯にも行きますまい三分の二は人の奥さんと成て奥座敷の内にクズ／＼して生涯を終へねばならず實に男子と同樣に年月も學資も費やし晝夜の苦學もなして同樣學識も得たものゝ男子は之を充分に活用しそれ丈の尊敬も世人より受け天下後世まで名も出ますのに女子は誰知る人もなく所謂學識の持腐れとも申しませうか大に損です斯く云つて見れば女生徒は失望學問は最初からせぬ方が氣がきいて居る樣ですが中々左樣でなひワシントンも賢母から生れた孟子は賢母の敎育を受けたと云ふ日には取も直さず智德ある婦人は國の英傑を出す大藏省です是程大切な事はなひ先づ女子こそ學問せねばならぬと申せば十分ですが此の外に女子でも其得た學識を十分に世に働かす妙法があります男子は都會の演說堂で演舌するに隨分汗も出で聲も涸れ精神も疲れますから牛乳や卵でも餘計にたべて出席せねばなりませぬ又遠き處なら車代も船賃も入ります而して聽衆は多くて三千人です然れども其の中が皆氣を入れて聽ても居らずおまけに其場を去るときは大概忘れて仕舞ます又何の事業を爲すにも東西に奔走せねばならぬ然るに私が申す妙法は是と違て女子諸君が門外に出なさるにも及ばず聲も汗も精神も御出なさるにも及びませんから牛乳や卵を餘計に召上るにも及びませぬ車賃船賃も入りませぬぢつとして御出なさつて世人を感動させ社會を益するは三千人位ではありませぬ幾万人か分りませぬ而して一度で忘れる樣な事でなく後々の世まで益します實に妙法では有ませぬか斯る妙法

を今日の女生徒さんは知りませぬから矢張守錢奴が錢を家に貯へるとばかり知りて世の爲に之を用ゆるとは知らぬと同樣で學識を腦に貯へなさるばかり之を用ひなさるとは一向無く寶の否な學問の持腐り惜ひ事です。（未完）

○鶴龜松竹梅（其二）　鈴木弘恭

次に松竹梅であるが是は古くより裝束の模樣などにもありて（但し裝束の模樣に松竹梅と揃て有るには非ず松も竹も梅も有といふこと）愛たきものなれば中古の頃より產屋の諸道具には必ず松竹梅の畫を胡粉にてかきたりさてめでたきわけは梅は百花の魁して雪霜を凌ぎ年の始め第一に咲くものなればば愛すなるべし松竹は年經ても寒暑を經ても色を變ぜざればその節操を以て愛すなるべし。

偖マツ（松）といふ名義はマトの義にてマトは眞門之古へは必ず此の木を門口に植たりといふ事である後世一月の始めに門口に松を立るもこれらの故か今も見越の松など俗に唱ひて門口に植てあること東京ばかりではなく全國一般に多し眞門をマトといふは眞入口の義にて總て出入所を古へはトといへりミナト（湊）といふは船舶の出入る所なればいふ之セト（迫門）ミト（水門）は舟又水の通行するより云ふ之天のとわたるといふも日月鳥などの通行してわたるものと見做していふ名之然してマツをマトと云はタチツテトといふた行の第三の音を第五の音に轉じたる之上のカミをカメといふもか行の轉音なり大和國の高圓山もタカマトともタカマツ共兩樣にかけり萬葉集には高松山とかきてタカマトヤマとよませたる所が多くあります又一說に松の木はマトノキの義にてマトとは目途之門口の目途に植る木故に云之弓を射る的といふも目途の義之日はめ之めといふべきをマと云は例の轉言之目にて守をマモルといひ目の毛をマツゲといひ目の尻をマジリとよぶが如し此の說によれば高圓山も高くして目的とある山といふ義なるかもしれず。

次にタケといふ名義は丈立のたかく生長する狀より名付たる名詞なれど是も語尾がカキクケと轉じてタカともタキともタクともタケとも通じて云へども其義は一之假令ば

タケ筈　タケ山　タク村の類も　タカ筈　タカ山　タカ村　と云べき之今はタカ山タカ村など大てい申さぬが小野篁をチノ、タケムラとは云はぬでありましやう。

偖此のタケといふは物の先へ〱と進むかたちの義でありて日本武命のタケ猛の武士たけ〴〵しき人などのタケは勇む心

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の先へ進む方より云也山より落る水をタキといふは水勢の勇ましく猛り流るゝ方より云也故に萬葉集などにタギチ岩走瀧などあるハ山川の激流の所をも皆タギと云事にて後世の如く高き所より落る水ばかりを瀧と云わけではない鐡瓶の湯のタギルといふは湯湯の勇進する方より云也鳥のタカ（鷹）と云も勇む心より云也故に猛き鳥は皆おしなべてタカといふ夜のタクル（更）またタケナハ（闌）といふは夜の時間の進みて高くなるをいふ年タケたる人と云は年の數の進みて高くなりたる也又高くなれば物の隔が遠くなるから高きと遠きとは同じ意にいふ例多し高祖の事を遠祖と云が如しさて此の遠高きといふ詞を組合せるとタツトキといふ詞が出來る此のタフトキハ甚高きと云意又甚太きと云意になりて最も敬した詞となる故に高き人低き人といふも貴き人賤き人と云も同意である此のタカキといふは位の進みて高くなれる方より云ふのである。

次にウメ（梅）は諸説あり就中て烏梅の字音より起りし名也と加茂眞淵翁がいはれたるはよきやう也烏梅とは梅實を干たる也しかし今の梅干の如く鹽積にして乾たのではない藥店にある桃仁杏仁などの如く乾たるなり此の梅仁を韓土より持渡り來りしを筑紫に蒔きたる所が生長して美はしき花が咲しより烏梅の花と云て愛しそめたる也と云事で今も九州地方には梅が多くあると云ことです。

又愛國心の人にて贔負して梅は外國の產でないやはり古代より日本にありし也といふ人もあり私もいろ〳〵考へてうめはうまの轉言にてうまし國うまし人などいふが如くうまし花といひしをやがてうまとのみ云て轉じてうめとなりたる名稱也と云たいがだん〳〵詮索して見ると山野に自然生の梅といふはどうもない日本は古代よりある樹木は大低山野にも自から生じてある則ち櫻などの類也梅の如き人家近き所にのみあるものも山野にある道理なり上古は皆土人は山に寄りて住居したると也然るに梅は山野に自生のもの無きをみれば其元は舶來物かと思ふ一證である然らば其名もしばらく烏梅の說にして措きましやうしかしながら中古の頃より人々大に此の花を愛した天皇陛下も御愛し遊ばした今より千百余年の昔垣武天皇が西京の今の都府の所へ盛大なる宮城を新築して平安城と號して始めて住みたまひし時に南殿の前に花の木を植給ひしは梅也此の梅の枝を仁明天皇の承和の末に皇子が枝を折たまひしを贓れせ給ひし事などあり其後に至りて櫻に植替させ玉ひて今に至るまで紫宸殿の前には櫻と橘とがある例になりま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

した。

是より後も梅を人々が愛した證據には當時花とのみいふ時は梅の花のことゝ後世は花とのみいふ時は大かたは梅の花の事です其例は古今集に藤原のことなほの歌

春やとき花やおそきときゝわかむうぐひすだにも鳴ずも有かな

同じく紀友則のうた

花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはする

同じく在原棟梁のうた

はるたてど花も匂はぬ山里は物うかるねにうくひすのなく

同じく紀貫之のうた

人はいさこゝろもしらずふるさとは花ぞむかしの香に匂ひける

是等は皆梅の歌なるを見て知るべし又ウメをムメといふは往來言といふ格にてウマ(馬)をムマといひウベ(諾)をムベといふの類にて古くはむめむまむべとは云ず中古以來いふ言なり。さて本日此の鶴龜松竹梅を取り出して祝辭に代たるは則ち本舍の常磐堅磐に長くたち榮え行かんとは元より諸君と共に願ふ所なれど此の若干の生徒諸氏も日に月にその學術を收めて梅花の如く美はしき女子となり其の香の如くかぐはしき芳名を世にかをらせ早晩人の妻となりては松竹の節操を保ちその兒を擧ては蘆鶴の子を思ふが如く能く愛育してその教育を綏にせず好き人となさん事を思ひ龜の齢の如く其良人と共に幾久しく榮えたまはん事を切望するの外ならざるがゆゑであります。

批評

○紅葉山人の「色懺悔」(其一)　藤の屋

まづ順々に申さうぞ。表紙は凝つたもの、古代摸樣に紺紙金泥は面白し蟲蝕は面白からず。扉は蜀山風の御自筆、藤色に出されしは御手際、是を海墨の珍趣と云ふか。春のや隱居の序文一向に面白くなし、兎に角文壇の元老に一生懸命で賛められたる硯友社員の羨ましさ。及時雨は果して誰かト疑を殘されし御愛敬恐ろし、及時雨は紅葉山人なりト申したし(紅葉さんお驕りよ)。自序頗る輕妙、宛然たる風采。「天水桶には蛟龍湧かず芋畠には栴檀生へず」の句有がたし。「作者曰」はなくもがな、否エどうして——江湖の明盲目を教へらるゝ御深切の有難さ思はず涙を催し候(こゝらが主眼のある處か)。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さて本文。許六の百花譜を引證ありしは妙、ダが他の卷におけり。二十三頁に「おッしやては下さりませぬ」とあるは夫に對する詞にて他人に物語るとは思はず。二十六頁に「此上もない弘誓の船」とあるは中々シャレタ文句是が比丘尼の口から出るとは……。二十九頁に「鋸に柄や附けたる」とは不思議、柄のなき鋸はそも何處にやある。三十頁より三十二頁に至る修羅場はもとの南龍にでも讀ませたし。「氷をおし破りて」と三十頁にあるは横紙破りの力持めきたり。此處緑芽の插畵は一等の出來なれども本文と相違するが如し、本文には「なをチラ〱名殘をふらす曉の空」とあるに――「斷卷もなく蓬髮大童にふり亂し」とあるに…。四十七頁に「此髮の毛は」云々、なんぼ戰國とは云ひながら紅梅の一枝を遺物とは餘りに無造作過ぎたり……今少し工夫もあるべきに。四十九頁の武重が詞餘りに情なし――それのみか「鼻の先に「へゝ」と笑ひ」とあるは愈々無情にて腹からの敵役と見ゆ。五十頁に「目も眩み心も消ゆる」云々とあるは男らしくなし、時姫流の女性ならば兎に角「病めども虎」と形容したる武者が――心弱し〱。六十六頁に「お…お……お…お情ない」トハを…を…を…をかし。省亭の插畵――サモ病人と云ふ姿、それを抱ふ手弱き止方、本文を呑込まれし恐ろ

手づくりは妙ならず。畵を刷込れしは御趣向なれどインキ濃過ぎて暗き部屋にてハ字が見へず。「都さへ」より「鉦の音其内に」まで名文句。六頁に「紙張の反古文字を出されしは敬服、全篇の眼目は此處です。ですが枕邊に夜を護る行燈――ヨモ煌然とする事あるまじ、それに「鮮やかに讀まれ」とあるはいぶかし。「眼近なる一通」は斬新……でせう。「一書……書置……の事」とは中氣病者の手紙か、書損じて二度までも重ねしあるか――覺束なし（ナニ…客の比丘尼が讀むまゝダト、扨はドモリ――不便あの容貌にて）。芳年の插畵――比丘尼の顏は難なけれど頭巾に疑よる事の夥しさ、はげしき風に笠取られさふな手付き、遠見の破屋は慥にアヅリ出しト見るは僻目か、散るは木の葉か――墨の溌たるにあらざるか、芳年の二字風に靡くもをかし。手紙は名文「往生致し候べく候」爺樣の茶咄に聞たれど見るは初て……いづ方の讀者も感心致し候べく候。十二頁の「まして俗の名」云々の句うまし。十四頁に「あなたも花の盛を其御姿……尼法師には勿躰ない御標致……」有情有がたし〱。十八頁に「そんなら今夜から姉上樣「い…い…妹」とあるはうまいもの、ダが芝居の臺詞め

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しさ……竹田の機關とはサテモ不埒な申分、屛風の畫は木片に麻糸か、花瓶に近きボチ〳〵は風なきに散る花片か——但しは花の香に誘はるゝ虻の類なるや。七十頁の「いかに芳野」云々の句、語は日本なれども躰は西洋……上下着て帽子を被る心地す。七十三頁に「熱鐵の盃を酌み新枕の針の床に鬼と添寐の夢を結び」とは僞なり……若し守貞が口より出しならば、誤てり……若し作者が推測ならば、後段八十九頁に「とはいひながら初枕——忘られぬもの」とあるに如何に進まぬ祝言とは云へ「針の床」とは情なし「鬼と添寐」とは心強し。七十四頁に「此程守貞が戰場へ向ひしに二ツの目的あり」云々は厚生舘にてシャベリさふな口調なり面白からず。八十五頁に芳野が「さん〴〵に破れ」と答ふるは不調法千萬、破れし卜語るだに憚るを「さん〴〵」とは何事ぞサテモおろか。八十九頁に「風に揉れて明……滅」とあるは敬服、……の效能爰に到て判然たり。九十一頁「更衣初の六日」云々より九十六頁「南無正八幡大菩薩」に到る離別の段は壓卷。九十六頁「敵を斫らんず太刀」云々の處、是も上下着て帽子被りし如く覺ゆ、面白からず。

大丈夫は斯ぞ散らなん櫻花さかりすごさで散るこゝちよく。

叢話

○男女相知らず

是空子

士らひは己を知る者の爲に死すと云へり、實に人を知るほど難きはなく亦た人に知らるゝほど難きはなし。古人云く人心の相異るは猶ほ其面の如しと、然らば若し其面を見ば其心の異なれる所ろを推し得べきか、嗚呼何んぞ然らん、演劇に於ては彈正は多く赤い顔をし、釆女は大抵佛け顔を爲す、若し此の顔色に由て其の心の知らるゝ如くに人が知らるべくば幸わひならんに、活舞台の人は大ひに異なる、陽虎は孔子に似、大賢は愚に似たり。

人は相知り難し、就中男女は尤も相知り難し、男子は女子に向つて大きく見過ぎ、女子は男子に向つて小さく見過ぎ、心配し過ごすものと心配せぬものと、思ひ遣らぬものと思過ぐるものと、譬へば下手な鎗の仕合の如く只だ、行違ひてのみ相ひ刺すなり。

然れども今の男女の相知ぬは尤もの事なり、茲に西洋人が突然舶來して日本人と交わりしとせんに、西洋人には本邦の人の心が分るまじ、日本人が洋行して初めて西洋人を見るときも亦然るべき歟、必竟此迄で交際もせざりし他國人なれば、

其互ひに相知らぬは當然ならん、左らば從來曾て交際したる覺へなき男と女は、中に於て其の尤も相知らぬこそ道理ならめ、少しも不思議の事にあらず。

吾人が交際する所ろ頗ぶる廣ろし、而して幾分にても人に知らるゝは甚だ少なくて、中にも女性に知らるゝは特に少なし、若し女に緣が無きゆへぞと云はるればアキラムべし、然らざれば「男女不相知」とかこつの外なき也。

○過去語（其二）　高橋おろか

花むすびの事は前に陳たるが如く婦人の職なりしが後世に及びては其職人出來しと見えて色音論草子江戸通り町の條に、かゝる屋敷に劣らぬは結び花屋にから物や云々又雍州府志に作り花師一條烏丸西に入る家に之を造る長絹の菊花等に著るゝ所此家に在り今處々に於て諸品を制す眞の花と差別なし云々或ひは江戸鹿子を見るに此職を以て聞ゆる者本所に九左衞門淺草に惣左衞門日本橋に甚右衞門等あり職人圖彙に依れば後世花車練物に用ゆる造花は原と花むすびより出たるものにて其變化せしものなりと云ふ。

染物も往昔は婦人の職なるが如く紺屋と云へるものあらざりしと見えて源氏（手習）に、かの人のいひつけしことなどを染いそぐ云々「是れは紀伊守が布施の装束を尼公にあつらへたれば尼公のいそぎ作るなり」又同書（帚木、指くひの女のとを云ふ處）立田姫といはんにもつきなからずたなばたの手にもおとるまじくそのかたもぎして云々「女の物よく染るを立田姫といひ織、縫よくするをたなばたに比するなり」とあり亦た同書（落窪）に、大將殿より少將の君の御裝束今はとくし給へこゝには内の御事にいとまなくなむとてよき帛糸、あや茜、すはう、紅、藍、など多く奉り給へればもとよりよくし給へりけるとなればいそがせ給ふ又中の君を藏人の少將にあはせし處女君いそぎ染させ裁ぬひし給ふにも昔思ひ出られて、きる人のかはらぬ身にはから衣たちはなれにし時ぞ忘れぬ、と云はれ給ひける云々夫れ此時代に於ては貴族的の婦人に於るも自ら染物を爲しが如し職人歌合はさらなり人倫訓蒙圖彙を見るに皆婦人が此業を取の圖出たり然れば男子の此業を取りしは元祿以後にあるが如く此專業者の出來しも近代こそと思はるゝなり。

總て是等の業は婦人の職なりしが足利氏の時國下大いに亂れ將軍の權微弱にして諸侯を制する能はず所謂有名無實なるを以て少しく軍力ある者は擧て國境を爭ひ隣國を劫し鮮血草葉

を染て骸骨は野に暴露せられ人心殺伐を旨として强盜は街道に往來し農工商に至るも安眠すべき時はなかりき然れば花を欺く姫君にあれ柳を學ぶ妻女にあれ專ら武術を練磨して姿に似氣もなく戰場に奔走し味方の鋭氣を勵さしむ即ち木曾義仲の妾巴御前の如き之なり夫れ如此き社會に於て尤も綿密なる最も面倒なる縫績、ゐかき、花むすび、染物等の業を取べき暇あらんや故に是を他に求ざるを得ざるなり求るもの出るに及びて又是を營業と爲もの出來ざるを得ざるなり然ば此時より貴族的の婦人に於ては是等の業を捨て武事を學しも德川氏國下を治るに至りて泰平無事なると二百八十有餘年の久しきを保ちぬ此際に當り鎗、鐵砲は玄關の飾物となり兩刀は武士の標目となり諸侯は妻、妾に溺れ幕臣は虎威に誇り士風柔弱にして武士たるの名義あるのみ夫男子に於るも此の如し况や柔順を尊ぶ婦人として能く武事を談ずる者あるべきか然ば閑雅の身あるを以て縫績、ゐかき、花むすび、染物等を爲しかと云に既に其業を營むの商賈ありて日用の便を欠ざれば今更學ぶべきの念なく又其勞を厭へり是に因て文學を學びしかと云ふに女子の才識あるは身を修るに害ありなど稱へて惟に深窓に育ひ一二の遊藝を學ばせて以て足れりとなす又本人も之に甘じて更に文學を學ぶべきの念なし故に夫に仕ふるや如何なる虐待を受るも唯々として是に從ひ權利を辨解するの學識なきを以て密に身の不幸を悲むに止まれり然るに今や男女同權論を稱へ女權擴張を主張して男子と文壇の戰爭を起せり婦人よ婦人君等の奮發勉强なると實に盛んなりと云ふべし。

○絕唱

古人曰東坡赤壁一賦一洗ニ万古一欲レ髣ニ髴其語一畢レ世不レ可レ得也、歌にも是に似たる事あり

有明のつれなく見へしわかれより曉ばかりうきものはなし

定家卿の詞にこの歌のことばつゞきをよばずおもしろくよみて侍るかなこれほどの歌ひとつよみたらばこの世の思ひ出に侍るべしとの給ふされば古今集歌十首のそのひとつ也、一條禪閣の說に定家家隆兩人のもとは八代集の中に面白き歌を取出て奏し可申よし勅宣ありしに兩人ながら此句を取出し申されしとぞ、題も逢無實戀ともいふ扶桑葉林集には不レ逢歸戀なり又逢別戀とも見へぬる流の心は不逢歸戀ありいづれにもあれ定家卿ほどの歌人の命にかへて思しめす骨髓のはかりがたきこそいつかこの歌の面白き事をしるべきぞ。有明のつれなきと云るつゞきも凡慮にあらずまた曉ばかりもあかつき

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

ほどと云ふ心にあらずとぞよく味ふべき事なり○歐陽公曰兩晉無文章幸有歸去來一篇而已　東坡が赤壁の賦淵明が歸去來の賦身にしみて面白く余もほゞこの文章の甚深なる事を覺ふ誰と共に此兩賦の意味を論ぜんや。（砂金草紙）

○旅のはし（其五）

むらさき戲稿

小供らしき考へにはいかに理窟を弁べる哲學者デモ及ばぬ事がたくさんあります、世の中にまことほど勢力のあるものはありません、みち子はかくしかざらぬ有の儘に、

惡いはあなた方が、おつかさんのおなくなんなすつてさむしがつて居らつしやるノニ……イジメテサ……先生方の事もいろ／＼御しやるつてソシテ山岡さんの事も、私はそう云ふ方を大へんさむしかろうと思て慰めたいワ、惡ひ方だつて何だつておつかさんをなくしてはどの位ひさむしひか、私もいまおつかさんに死なれては……皆さんは大勢ダカライーワ河田さんは一人きりだもの。あなた方もちつとは氣の毒と思わなくつて、

おみちさん何を御しやるノあんまり、

イーエ何もウソを吐くではなし本當の事を云ふノダワ

ソレデモ……小供の癖に……

小供デスヨ……あしたわ河田さんをさそつて宅へ行ノデスから今から仕度をするノデいそがしひからいづれ後から手紙を上げマス……怒らずに讀デちようだい……皆さんがそんなだと私もかなしひわ、よく學校のために神樣においのりをいたしましよう

○○○○○○○○○○○○

河田さん先日は御國のおつかさんがおなくなり遊ばしましたそうで本當にマー御察し申します、御美智も始終御氣の毒樣ダカラ御呼び申して上て呉れろと申しマスが……御覽の通りの手狹では御ざいますしソシテいらしつて下すつても何のおあいそうも御ざいませんし……日頃より御みちがいろ／＼と御世話樣にチー……まことにありがたう存じます、御存じの通りなり計り大いのみで本の小供で御ざいますから

ドーイタシマシテ、届きません

御かさんモーイーノヨ

何がイーノダイ……

そんなに云ふと河田さんがおこまんなさるもの

ソーデしよう學校中に多年あつた女生徒は、他人からしかつ

めらしく氣候の應答などを頂戴する時はしとやかなるに似ず大抵は行詰つて口のうちでもモグ／＼……またたくさんの御じぎで誤魔化しますが……ドーモコレワなにおこまりの事がある者かね……ソシテおみちから度々聞マスがマー定めしいろ／＼御腹もおたち遊ばしましようによくマー御辛棒遊ばしてチー……兎角多人數の居ります所ではドーモ氣がまち／＼で御ざいますから本當に御つらい事も御ざいましようがしかしあなた御辛棒が肝じんで御ざいます、おみちや御前何をして居るんダチー早くお茶を上ないかチー

モー御かまい下さいマスナ

河田さんモー山岡さんがいらつしやりソーナモノチー

エーもう直にいらつしやいましようヨ

山岡さんがいらつしる前に何かして遊びましようヨこないだホースさんに貰たドシングとスペリング、カードの二つがありますよ

お美ちや何だね、河田さんが御うるさいよ

イーエよろしふ御ざいマス。たまにおかつさんの御顏を見たものだからうれしさうデスコト……チー御美ちさん

ウソヨ……あなたこそ……アノ……

何か仕返しをしようと言の上へ出しは出したものゝ時子の母は、は既に死に去りマシタ故……何言を續く可きか見出し兼ねて居りマシタ、此時恰もよし表の格子戸を靜かにをし明け

御めんなさいまし……おたのみ申マス

此の言葉を幸に飛出して

山岡サン……おそかつたのチー

明くる障子に顏見合せ、みち子は思わず

チヤ吉川おまちさん　マー……

驚きました敵とも思ふ吉川ですもの……その上に伴ひ來りし兩名は小芝いそ子、吉村さだ子の兩人……案外デス何の爲の來訪ぞそろひもそろひて……河田の反對黨……

河田さんはいらしつて、一寸とお目にかゝり度い事がありますから出ましたと申上て下さい、ソシテ昨日はありがたう御みちさん

何となく薄氣味が惡ふでさいます、昨日みち子は大勢の中デ河田を思ひきり辨護しました、ソシテあとより吉川、小芝、吉村、花田等へ宛てゝ心を籠めし一通の文を送り、自分は今朝より河田を伴なふて歸宅したノデス、もしも大勢が

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

怒て議論にでも來たノデハ……ソレトモふだん自分と中の悪いノデモなし遊に來たと云ノカ……しかし河田を尋ねて……サッパリ解せません、小供心に急に心配が湧き出ました……

河田さんに何か御用があるの……

エー昨日頂戴したあなたの御手紙に付て、河田さんに是非とも御話しを願ひたひノデス

族のはじ長々しくかき立てまして恐れ入りマスあまり長くなるとあらが見えるから止めたらよからうさ何方よりも矢の御小言ヲ一回デ結局といたしますから乎にいま一回の御讀を願ひます。

佳傳

○パンセアの傳

田村直次

カイラス大王のアッシリアを征服するや、捕獲最も多かりし中に、一人の美人あり、名をパンセアと云ひ、容姿嬋妍、風采優雅、國色の譽れ全都を傾けり、初めパンセア女帝の夫をアブラダタスと云ふ、カイラス王の來り襲ふや、アブラダタス偶々使命を奉じてバクトリアの王庭に在りしかば、憐むべし最愛なる女帝は獨り楚囚の悲に沈みたり。

パンセア女帝は亞細亞中無雙の美人なれば大王の喜び一方ならず、然れども當時パンセアの心中果して何如ん、操を破りて敵に從はんか、富貴尊榮望む所に委すへし、獨り所天の夫を何如せん、彼を取らんか、身は不義に陷るを何如ん、此を舍てんか、鼎鑊素より其分なり、美人の苦心思ふべし。左る程にパンセアは意を決して、自家の容色を隱さんと欲し、更らに侍女の衣を被りて、柳腰の美を蔽ひ、輕紗を曳て、芙蓉の顏を遮り、大王の瞥見を防がんとせしも天の成せる麗質は包むによしなく、君王の寵を免かれべくも見へざりける。

ペルシアの一吏あり深くパンセアが憂苦に耽るを憐み、之を慰藉せんと欲し、從容と說けるは卿復た良人を思ふ勿れ、カイラス大王は深く卿を愛せり、況や今卿は楚囚の身たり、良人を思ふも寧ろ爲すなきなり、若かず權勢名望兩つながら良人に超ゆるの人に遇ふて、共に尊榮を俱にせんには、語未た畢らず、パンセアは何か心に思ひけん、雙眸に淚を浮べて、高節顏色に著れしかば、觀る者其貞操に感ぜざるものなかりき、

カイラス王は、其志操の最と高潔にして悲壯あるを聞き大に感嘆し、斯る賢婦とあるからは決して辱を衾榻の間に蒙らしむべからす、宜く厚く之を遇し、以て其節を全ふすべしとて、侍臣アレスペスに命じて、奉仕怠りなからしむ、然るに人情の已難きにや、アレスペスは何時しか深くパンセアの美を慕

ひ、遂に君王の嚴命と、パンセアの貞妻たることを忘れ、只管思ひを悩ましける、去る程にアレスペスの戀思日に甚しければ、パンセアは不得已、之をカイラス王に訴へて、保護を請ひしかば、王大ひに怒りて、直ちにアレスペスを貶け、更に命じて斥候たらしむ、パンセアは此事を聞きて、王の賞罰嚴明なるに感じ、使を馳せて、王に稟する樣、願くは大王アレスペスを苦しむる勿れ、大王の仁若し賤婦を良人の許に送らしめば、賤婦能く大王の徳を頌し、良人をして謹て大王に使へしめん、其功蓋しアレスペスの上に出づべしと信ずるなり、今のアッシリア王、嘗て反間を縱ち、吾夫妻を離隔せんとせしとあり、良人は深く其不義を惡めり、故に賤婦今大王の恩威を以て之に望まば、良人必ず彼を去りて此に就くべし。

斯て、カイラス大王はパンセアの言を嘉納して、書を良人に送らしむ、パンセア盛んにカイラス王の徳を讃しければ、アブラダタスは直に歸順の心を起し、パンセアの言に違はず、精騎二千を率ひ、馳てカイラス王の軍門に詣れり、未だ牙營に達せざるや、使を馳て歸順の意を表しければ、カイラス王は大に喜び直ちにアブラダタスを警護して、パンセアの舘に送りたり、「パンセア」の「アブラダタス」を見る、悲歡交々集りて、手足の措く所を知らず、共に大王の恩遇隆渥なることを語りければ、流石に勇猛なるアブラダタスも感激の情に堪へずやありけん、叫で曰く、嗚呼我何を以てか能く大王の徳に報ひんと、既にしてカイラス王は、禮を厚ふしてアブラダタスを延見せしかば、アブラダタス大ゐ喜び、誓て曰く、余は今より王の爲めには朋友たり、臣隷たり、又能く同盟者たるべしと、王亦曰く、余の君を視ること、猶兄弟の如くなるべし、希くは相疑ふ勿れ。

時にカイラス王、埃及を撃たんとし、大に兵馬を徴す、アブラダタスも亦手兵を擧げて之に會せんと、用意も既に整ひ、早く出陣の時とありければ、パンセアハ良人の爲に、軍帽、佩玉、紫綬、紅章等まで遺すものなく備へつゝも、別離の情の堪へ兼ねて、覺へず袖を濕せり、軈てアブラダタスハ徐かに鞍に倚て馬を駐めしかば、パンセアハ慨然として今より後、天下若し其夫を愛すること、其身に勝るものあるを聞かば、必す我なることを知り玉へ、然れとも我亦勇士の妻なり、義の爲には能く良人と死を倶にすべきも、決して生を恥辱の中に全ふす可らず、良人願はカイラス王の恩を忘るゝ勿れ、必ず偉勳を馬前に奏し、以て英名を千載に傳へ玉べし、是れ我が一生の

志願なり、アブラダタスは大に妻の語に勵まされ、手を握りて、誓て曰く、嗟呼皇天上に照臨せり、余をして誠に吾妻に愧ぢざるの眞人にして、又能くカイラス王に負かざるの眞友たらしめよと、言ひ畢て、馬を進むれば、パンセアは猶も離別の惜まれて、暫く其跡を慕ひしも、今や是れ斯の世の別れとは、夢にだに思ひ及ぶべき、去るからに、アブラダタスは顧て、吾妻よ、再會の日を期して、能く其身を愛すべし、今や時到れり、暫く別れを告ぐるなりと、鞭を擧げてぞ走りける、パンセアは消然として獨り眞人が跡打ち眺め、動くようも見へざりし、勇士眞妻の心いと想ひ遣られたり。

内に賢妻の愛あり、外に眞友の義あり、アブラダタスの勇、平生に百倍し、向ふ所敵なく、英名大に震ひけるも、最と故あることにこそ、斯てカイラス王凱旋して、將士を賞せんとするに及びて、アブラダタスの覲へざりしかば、怪みて侍臣に問ひけるは、アブラダタス將軍何くに在る、何ぞ來るの遲きや、對て曰く、彼既に死せりと、王之を聞て大に慟哭し、速に其死骸を召さしむ、パンセアはアブラダタスの骸骨を扶けて王の御前に出づ、王泣て曰く、哀哉忠勇アブラダタス、我を棄て遠く逝けり、忠勇あるアブラダタス、汝其れ我を奈何せんとて、其右手を執らんとせしに、豈に圖らん、腕は截れて側に在り、パンセアは堪へ兼ねて、胸を搏て號叫し、嗟呼眞人を殺すものは、賤婦なり、曩に妄りに義を以て勵ますの賤婦なかりせば、彼れ必らずや俄かに死を以て大王に報ぜず、永く王廷の柱石となり、名を麟閣に留むべきに、淺き婦人の感情に訴たへて、王の爲に斯る勇士を喪ひたり、死す可からざる人は死して、死すべきものは生けり、賤婦何の面目ありてか大王に見へんやと、王亦首を俛れて言なく、左右盡く潸然たり、姑くして、王喟然として曰く、斯の妻ありて、斯夫あり、吾將た何をか恨みん、アブラダタス死すと雖も、其忠沒すべからす、我厚く汝を封し、碑を建て其功德を表頌すべし、殊に爵位を敍して、汝の名譽を永續すべし、其他車馬僕從の類一に汝の需に應ずべし、只望む痛悼の餘り、其身を毀ふ勿れ、パンセアは感涙禁ずる能はず、深く大王の恩を謝して、大王聖慮を勞する勿れ、賤婦別に望む所あり、遠からず大王をして之を知らしむべきなり。

カイラス王性慈仁、深くアブラダタス及パンセアが別離の慘狀を思ひ遣り、中心甚だ安らず、便ち侍女を警て、善くパンセアを護らしめてぞ、還御せられたり、パンセアは懇ろに侍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女を謝遣し、獨り一婢を留めたりしに、早くも主人の意を悟り、百方慰藉して其心を變ぜしめんとせしも、パンセアは更に動かず、一刀を振て、胸膈を劈き、流血淋漓の中に、アブラダタスが屍上に斃れたり。

嗚呼パンセアは節婦と云ふべし、惜哉眞理の光は未だ其胸臆を照さず、信ずる所迷ひに出づ、故に義を誤り、愛を謬り、唯其身を殺すの貞たる忠たるを知りて、未だ其行爲の愚を悟らず、曩きにパンセアをして上帝の愛と義とを解せしめば、斯る凶暴悖逆の行に出ることなく、其婦德の美音容の麗と兩ながら閒然する所なかるべし、雖然吾輩は人の妻としてはパンセアの心を慕ひ亦深く其不幸を歎ずるなり。

○困た樣だ

ある男あきんど店へ來り「モシちと物がたづねたふござります福德屋德右衛門樣と云ふはどれでござります　店の手代「ハヽア福德屋德右衛門樣とは困た樣な名だがどこでかあつた貴樣知らぬか　ひとりの手代「イヤ知らぬ　いかさま困た樣な名だモシ旦那あなた御存じではありませぬか　旦那「されば困た樣だと暫く考へオヽきいた樣なはづだモシモシそれは私しのところで御座ります。

○遣る處はない

ある人友だちが女房よんだと聞き喜びに行かんと道にて魚を調へひつさげて行く「どふだ八こう貴樣かゝしを持たさふだ喜びに來たと云へば「ソリヤ忝じけないが昨日もの女房は出してしまつた「オヤそれはさんだ事だ折角さかなを買て來たものをイヤ幸ひまだ外に女房を呼んだ處があるからそこへ持て行ふとひさげてうの內へ行き「コレ權七女房を持たさふな目出度と云へばこゝでも「イヤ昨日りの女はさりましたトいふ故こいつはつまらぬまゝよ內へ持て歸つてかゝあと二人でくつてしまをふといそぎ內へ歸れば大屋樣が「コレコレ今貴樣をたづねにやつた貴樣のかゝしは間男とかけ落したト云へばかの男「コレハしたりそんなら此さかなはもふやる處はないかしらん。

小說

○理想の紳士

第十二回　科學の書實學の書。

月の舍　しのぶ

旦那、あけろ〳〵、あけて下さいよ、たのみますよ。

怒れる聲、泣ける聲、怨める聲、製造所の表てに喧まし、安部富郎は二階の窓より少しく顏を出し、

よし〳〵、今ま投げ下すぞ、乞食ども。

喜こびの聲、非難の聲、潮の如くに起れり。余は襄と顏見合せて父が慈善を爲し玉はんとするを喜こび、特に襄は

實に左樣です、定めしさう爲さると思ひました。

ナニ私が降參したと思ふのか。

イヱ無理になさるのでもありますまい、又生命が惜しくて爲さるのでもありますまい、實に夫れが正理だからデス。

一寸つと手をかしてくれ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

父は簡短にかく言ひ玉へり、其の俵は最と大きくして中々に重けれども孃が強き腕には何の事もなし、容易すく持上げて窓の口に寄せかくれば、

其儘に突出セイ。

夫れでは河の中に落ちて仕舞ひます。

イエ、よろしひッ、突出せッ。

孃は固より遲疑して確かと俵を持てり、父は忿怖に激し、殆んど制しがたき樣にて、立ち掛りて突き遣り玉へり、孃は父に掛念して手を離せば、大俵突飛、ザムブと音して河中に陷いりたり。

余は喫驚して叫び、孃は突立ち上りて無言、父は後ろに腰かけて睨み玉ふ。

ソレと譟ろき騷ぎて走り寄り、陷いる俵に辛うじて手を掛しもありしが、其は皆な諸供に水中に溺れたり、見る／＼白泡を飛ばして水底に沒したるが、底にて何か角立ちたる石の類にて切られしにや、俵は破れて小麥浮み出でたり。

岸に立つてアキレ反りたる一揆は、之を見て又もや狂奔し、直ちに飛び入りて流るゝ粉々を追つ掛け、手に僅かに一と抓みを取りて其儘口に入れる、岸に殘りし女子供は羨ましげに泣き叫ぶ。

孃は兩手にて顏を覆ひ、密かに泣きて祈禱したり、父も一時の怒り稍や靜まりては、平素の善心抽起してか大ひに悔やみ玉ふの狀あり、顏色青ざめ息氣せわしく特に元氣なし。

孃は耳を欹だてゝ表の人聲を聞き、急かに父に向ひ、

アナタ、サ參りましやう、一分間も遲くなつては成りません、火をつけるやうです。

ナニ、火をつける、つけさせるがイゝ。

つけさせる、玆に文さんも居られますに。

あわれ、父は余の爲にか無言にて立ち上り、孃と余とに助けられて二階を降り、裏口より出でゝ元と來し道に反りぬ。

お宅へは歸られません、私し方に居らつしやい。

父は無言にて點頭づかるゝのみ、余は孃が住ひに行くと聞ては恰かも天國に入るの思ひす、常になく輕ろく歩みて彼處に到着したり。孃は寢臺に毛布二枚を布き、向くれと心を盡して父を休ます、父は亦た無言、たゞ謝すると云へる面色にて其儘寢臺に横たわり玉ふ。

文さん、

昔しの如く兩手を余が肩に掛けて、

アナタは何んともなかつたノ、少しは丈夫にお成なすつたか。

余は答へせず、否な答うることを得ずシカと手を握る、彼が優しき言葉に心も溶くる計りなり。

サ、モウ行きましやう、さやうなら。

何處へか、

父は急に起き上りて聞き玉へるに、

お宅と柔皮塲とは防げましやう、殘念ながら粉塲は棄てなくては成りますまい、イヽエ御心配なさいますな、私しは大抵存じて居ますから別段危なくはありますまい、特に若いから……何にアナタ。

裒は再たび握手して出でぬ、父は又た無言にて元の如く横はる、後は太陽すでに沒せし如くに暗らし。

父は何とも仰せられずスヤ／＼と眠りたまう如く見ゆ、余は裒が住ひに在ると思へば何ほ何にとなくうれしく、初め玆に來りて此の二階を裒が爲に借りし時は、すでに數年の昔しなれども何ほ昨日の如く、千々に思ひ出して獨り樂しみたり。靜かに歩ゆみ廻りて裒が室の飾り付けを見、棚に積みし書物を見たり、書物は悉とく科學、實學の書にて、シエクスピアの全集を除く外は一つの文學書あらず、窓には厚紙にて手製し之にレンスを巧みに着け合せたる望遠鏡あり、机の前には自ら工夫せし機物器械を措き、今朝編みかけし糸を其儘丁寧に整へたり。

嗚呼裒は如何に刻苦勉勵し、如何に實用の才智忍强の情を兼たるよ、余は一層彼を慕はしく思ひ、亦た大ひに自から得意となれり。

寄書

本號餘白に乏しく此の欄を省く。

新報

(此の欄内自由に轉載を許す)

○高等女學校行啓

皇后宮陛下には兼ねて仰せ出されたる如く去る十二日午前九時御出門にて一ッ橋外なる高等女學校へ行啓あらせられ生徒の學業手藝等を御覽あり了りて隣地なる私立女子職業學校へ行啓ありて生徒の課業及び生徒の製作品陳列塲等を御巡覽ありて午后四時過ぎ還啓あらせられたり尙ほ聞く處によれば高等女學校生徒へ菓子料として金三百圓下し賜はりし由。

○愛情論

六合雜誌第百號に元良勇二郎氏の「愛情論」を載せたり、氏が新鮮卓確なる議論は常に吾人が喜こんで讀む所ろなるが、此の論に至りては特に敬服したり。夫婦同等の愛を說て云く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同情相親しむには二三の狀態なかる可らず、一言に此を云へば自己より柔弱下等なるもの丶同感は人心に快樂を與ふると甚だ少なし、自己の尊敬する人の同感は精神上大なる快樂を與ふるあり、故に人の妻たる者其夫の下婢の如く自己の意見を主張するとなく唯御機嫌如何んと始終天氣模樣を見て其豫防をするも如何で其夫に眞誠の快樂を與ふるを得んや、此に反し教育ある婦人にして夫と相共に世事を談じ互に相助くるの能力あるものなれば苦樂を共にして快樂を與ふると甚だ大なり。

又た婚姻と金錢との關係を述べて云く、

金錢は何如なる物ぞ、金銀銅紙幣は中間に在て過去の勤勞を代表するものなり、我等の勤勞を以て他人の勤勞を買ふとを得るなり、或は愛情を以て愛情を買ふとあり金錢と愛情と交換するとあり、悲しむべし我國一家の妻にして金錢と愛情と交換するもの十の八九なるを信ず、金錢にて賣りたる愛情は御無理御尤も主義の外に出るを得んや、夫は妻に拂ふに金錢と愛情とを以てし妻は此に酬ゆるに愛情のみを以てするときは此れを正當の交換と云ふ可らず、夫は妻の爲に犧牲にする所あるなり、此の不平均を救ふに唯だ一の方法あるのみ、妻が夫に對するに金錢或は勤勞を以て金錢に酬ひ愛情を以て愛情に酬ゆると是れなり。

面白くも說かれたり。

○渡邊洪基君

頌榮女學校に於て演說せられたるを拜聽せり。决局、男女同權とは必らずしも同じき權を得ると云ふにあらず、旦那が金を拂ひ奴婢が勞を以て酬ゆるとも純然たる交換にて其の權は同じ。又女子教育とは必らずや男子の教育と別なるべし、必竟母とあり妻となる爲に教育せられざる可らず、と。大主意は固より贊成なり、然し君主と奴婢との關係を以て同權なりと云ふべきか、又た女子は母妻となる爲に教育せらると云ふものは、何卒亦た男子は父夫となる爲に教育せらるゝものと仰せられたし、同じ事也。

○浮雲と腐れ卵子

爰に「情」を編輯し、今亦た「時務評論」に於て快筆を揮はるる人の云く、

近頃二葉亭氏の小說の如きは、稍社會經綸的の眼孔を具したるやに覺ゆ、嵯峨の家氏の都の花第九號に投じたる短小說は、大に女學雜誌記者の憤慨を惹起したるが如し、吾人も亦彼の小說を讀みて憤慨したる者なり、然れども吾人の憤慨は、女學記者の憤慨に異なり、女學記者は、彼の小說著者を浮薄なる文學者さして憤慨せしが如し、吾人は然らず、彼の小說の材料と爲る如き人種が此社會に存在するを憤慨せり、蓋し彼の小說著者は、決して浮薄なる文學者に非ず、

樣儀の餘り、知らず〱、醜を摘み穢を許きしのみ、若し勸善懲惡的規矩に依むれは、彼の小說は懲惡的の小說なり、決して爲永春水の小說の如き勸惡的の小說にあらざるなり、

若し然らば幸わひなり、吾人は特に彼の「寢室」の一部わりしに由りて然らずと判斷せし也、然れども嵯峨の家氏は篤行清潔の人なり、願くは再たび前の如き失筆に陷いり玉ふ勿れ。

若し彼の小說に醜穢なる狀態を寫したるを、咎むれば、二葉亭氏の著作も亦咎むべきにあらずや、彼の浮雲も隨分醜穢なる狀態を寫し、讀者を惡癖せしむるにあらずや、女學記者平生二葉亭氏を賞贊して獨り嵯峨の家氏を咎むるは何ぞや、

吾人豈に殊更に人を傷くるものならんや、願はくは愚草「小說家の着眼」を一讀するの榮を賜へ。

女學記者は、宗教家として社會經綸的の眼孔を具する者なり、二葉亭氏及び嵯峨の家氏は、小說家として社會經綸的の眼孔を具する者なり、吾人の目より之を視る時は其心術に於て孰れも相似寄りたる人なり。

有難き事也。

○敢て女學記者に敎を乞ふ

女學雜誌記者足下去る六日發兌の女學雜誌新報欄内に於て亂暴者横行すと題し近頃本鄕春木町梅毒病院及神田區役所等の近邊にて夜深くるに及べば廉恥無きの暴人出現して通行の婦女子に對し無禮を加ふるものありと無智の暴兒實に惡むべく實に憐むべきなり然而して記者は爲めに女流社會に訓戒するに夜行必ず鋭利なる小刀を懷にして宜しく正當に防衛すべきを以てせり吁之れ果して平生淑德優美の女子を造り出さむと孜々せらるゝ記者の口より出づるの語なるか思ふに記者が社友の知人が此無禮に逢ひたりしより激昂の餘り終に此言を爲したるならむか吾人は吾人が敬愛し囑望する所の女學生諸子か常に更深け人跡なる所を傲然濶歩するを見て心竊かに其の膽の大なるを嘉みして其輕擧謹まざるを惜ますんば非るなり然るに記者は敎ゆるに小刀を懷にして以て正當に防禦せよと云ひしは能く之れを以て野猪無恥の暴兒を防ぎ得るさ爲すか將しや之れを防ぎ得るさするも婦女子か深夜途上に暴客を縛したりさするは果して以て其名譽さ爲すに足るか吾人は却て恐る或ひは其德を傷けむことを吁記者は何爲ぞ一歩を轉して之れに忠告するに荀くも身を愛し身を重もんずるの婦女子諸君は深夜單獨家門を出づる勿れと云はざるや蓋し記者は月西山に落ちて夜沈々行人疎なるの途上と雖ども劍を懷にし來往するを以て文明婦人の本色さ爲すか淑德優美の婦女子さ爲すか敢て敎を乞ふ。

駿臺僑居に於て

門伊鐵鞋子

不幸にして鐵鞋子に同する能はず、吾人は平生「危を避けよ」と云はんよりも「危に勝てよ」と言ふもの也、吾人が前言豈に一時の激昂によりて大事を誤まるものならんや、切用もなきに深夜往來するは固より平日にても淑德に適せず、吾人が謂ふものは用務わつて往來すると認めし上へなり、此時に當つて只だ危うきを避けしむるは吾人が望む所ろにわらざる也、此事小事なりと云へども吾人が平生の大主義に關す、吾人が女子敎育は不幸にして鐵鞋子の希望に異なる。

○老孃會

熊本籠城會の事かと思ひしに、左はなくて獨逸ベルリンにありしとのよし、同府に最と面白き一の會わり其名を老孃會（ヲールド、メイド、ソサイエテー）と稱す、會の大主目とする所は人生の淺果さ浮世のわじきなさを歎つの餘り結婚は偕老和樂幸福圓滿の基ひたらで偶ま不幸憂愁の媒なれば之

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れ寧ろ無益なりとの主旨にて今を去る九年前千八百八十年始めて此の會を組立てたり當時發起の未婚婦人は二十三名にて固より淺果なる考案なれども一時世の好評を博し千八百八十三年には會員三十一名に及びたり尤も此會の規約に萬一其身を忘れて結婚する者ある時は違約者より必ず一千「マーク」の過料を拂ふべき條目ありて堅く斯約束を守ることゝなりたりされば弱き人の心ろと秋の空變り易きは浮世のならいとでも申すか其後日を經て會員漸く退き今年の始に至ては殘れる者僅に二名に減じ只だ殘たるものは過料にて其高金二萬六千八百七十八「マーク」(一マークは吾が三十一錢七厘)の巨額となりたれば過日殘る貳名は賢敷も申し合せ直に資本を兩人にて分配し餘る大半を某病院に寄附して此會を解きし間もなく己か身も亦た有夫の婦となりたり。

○一夫多妻

米國にモルモン宗徒と云へる多し、一夫多妻を其の宗義とするなり、然るに其の多くが住居するウター領の判事サンドッホルド氏云く、此の悪習は今より十年間に大ひに減ずべし、今にても老ひたる人々は悔改して再たび多妻を置かじと訴たへ出で、若きものは后來決して左樣にはすまじと盟約し而して如此きもの日々に増加すと。

○養育院慈善會　上野公園内華族會館に於て去る十三日より三日間開會せられたる同會の入場者及び賣品收入高は左の如し。

	入場者	賣品收入高
十三日	六一一人	五九〇、三五〇円
十四日	一六五〇	八四三、三九〇
十五日	一三四〇	八二一、六七五

○東京女學校　今度神田猿樂町に開校したる東京女學校は榊芳英社長岡田恒子女史の設立せられたるものにして婦女子に有要なる和漢英の三學科及手藝等を教授せらるゝ由。

○高等女學校　今度有志者の寄附金を以て開校したる東京府高等女學校にては來月三十日迄に高等小學科卒業の女生徒中より百名を限り入校を許すと云ふ。

○產婆正副會長　日本橋京橋の兩區內の產婆七十余名には去る六日正午より京橋區役所議事堂を借受け正副會長の撰擧總會を開き三橋梅子を會長に西尾とも子を副會長に當撰せり。

○女雇人の數　去る九日の官報に揭載せられたる警視廳に於て調査せし昨二十一年中の女雇人の數は五萬八千九百六十人にして雇人請宿の周旋料は三萬〇一百十一圓〇三錢七厘なりし由。

○頌英女學校　去十五日各級の昇等者に卒業證を附與し種々の演說文章朗讀等ありしのち渡邊洪基君の演說ありし。

○海軍武官女子教育會　横須賀在勤の海軍高等武官の夫人令孃は先きに海軍武官女子教育會を設立せられしが今度其規則に改正を加へ平時と戰時とを問はず總て公務の爲めに死亡したる武官の女子を養育するとに定めたりと云ふ。

○大阪遊廓地　昨年來同地の一問題として評判高かりし遊廓場は此程愈々藤江村に決定して己に其筋の許可をも得たりと云ふ、可悲。

○函館女子職業學校　は創立以來次第に盛大に至りしが昨年の火災にて校舍と機械を失ひ目下假に校舍を建築せしも從前に比すれば大に衰微を致したり併し近頃此の校を賛成するもの日增に增加する由なれば日ならず回復の運を見るに至るべしと云ふ。

○日本赤十字社委員長及副長　日本赤十字社にては長野縣に委員を置くとを議決し木梨精一郎氏に委員長小野田元熙、梅若誠太郎の兩氏に副長を囑托せり又鳥取縣委員長山田信道氏は轉任に附き更に武井守正氏に同委員長を囑托したる由。

外報

(此欄內自由に轉載を許す)

○デンマーク　同國政府はグリインランドに於てハ一切酒類の商業を爲すとを嚴禁したり。

○ハワイ　ハワイ國への本邦移住民六千人あり其中ち一千五百人は悉とく禁酒會に加入したり。

○ヂルクを退けし人　過日ロンドン市長の撰擧會にて一千五百名の婦人に卒先し彼のヂルクを候補者の地より退けたる人はヒウ夫人(Mrs. Price Hughes)なりし由。

○ルーマニアの女王　は文學社會にてカルメン、シルバ(Carmen Sylva)と假稱し玉ひ本年四十五歲に居ませど頗る著作に耽り日々朝五時より筆を取り終日著述さるゝ由。

小供談

(本號餘白に乏しく此の欄を省く)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

如何にして躰溫を生ずるや

赤子は乳の外のものを消化する力なきゆえ他の物をやたらにやるは唯苦痛を感ぜしむるのみにて少しも營養にはならぬなり、總て躰溫を生ずる食物は炭素と申す元素を含む、炭素と云ふは石炭、炭の如きもの丶中に在る元素にして、火が燃へると申すのは石炭、炭、薪などに含み居る炭素が空氣中の酸素と合する働きに過ぎず、前の章にも申せし通り、吾人は呼吸するとき空氣中の酸素を吸ひ取りて窒素を返す、酸素が躰內に入り血を新にする力あるとは前に說きたり、食物中の炭素が呼吸に依りて入り來る酸素と合躰するときは直きに熱を發す、是れ則ち吾人の身躰が常に熱を有つ所以なり。

澱粉質

砂糖

躰溫を與ふる食物の重なるものを擧ぐれば澱粉質砂糖牛酪脂肪質なり、澱粉質と申すは小麥の粉など凡て穀類に含み居るものにて、砂糖は御存じの如く甘蔗と云ふ植物より生ずるものなり、然し唯甘蔗のみならず諸種の果物よりも取れるなり、澱粉質は口中にて唾の作用によりて砂糖に變化するものなり、以上の食物は多量の炭素を含有し居れば身躰に熱を與ふる力あり。

小麥などは唯躰溫を生ずるのみならず、又た幾分か肉にもなる部分を有てり。

肉類

人の肉になる食物の重なるものを擧ぐれば、獸肉魚肉鳥肉鷄卵及び穀類なり、然し穀類は僅少ばかり肉になるべき部分を有てり、オートミールと申して裸麥の粉は肉になる成分を割合に多く有てり、

オートミール

オートミール或は小麥粉中には幾分か吾人の骨となるべき部分をも含めり。

野菜果物

以上列擧したる食物の外に野菜果物等を少量ヅヽ合せざれば血液不潔となり壞血病に罹る恐あり、水夫などが長き航海中野菜類の貯蓄盡きて此病を起したる實例多し、されば吾人は一種の食物のみに限ず色々の食物を混ぜ合て食すると肝要なり、身躰を分析するに礦物には曹達石灰マグネシア、ポッタシ、及び極少量の鐵分もあり、ポッタシは壞血を防ぐ効ありポッタシは渾て新鮮の植物殊に馬鈴薯中にあり又た菓物中にもあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

冷たき食物は消化し難し

食物調理のこと

食物料理に三つの理由あり

充分に生長して健康躰をもつ人は毎日熱を與ふる食物八十四匁、及び肉になるべき食物四十二匁を取るを要す、尤も水は此外なり、植物性の食物ばかりにても此だけの分量を取ることを得れども、植物は水分多きゆゑ同形分百廿六匁を取るには餘程澤山食せざる可らず、且つ又た植物は肉に比ぶれば消化し難し。

あたゝかき食物は冷たき食物より消化し易し、然し餘りあたゝかき水物を多量に取るは胃の消化力を弱くすべし、殊に茶の飲過は大に謹しむべし。

食物調理のこと

世間の人を見るに誰しも生ま物より料理したる食物を欲するなり、其理由に凡そ三ッあり、第一は料理すれば生まの食物よりも風味よく且つ見掛もよろし、第二料理すれば食物を滋養ならしむ、第三消化し易からしむ。

斯く申さば或は生ま物より料理した食物の優れるは當然のことなり、世間に誰れか生ま物を喜ばんと云はるゝ方もあらん、然し世界には隨分生ま物を食する人民あり、例へば阿非利加のアビシニアの野蠻人は生牛肉を以て此上なき御馳走と考ふ、日本などにてもさし身と申して生まの魚肉を食するなり、食物を料理すれば同じ物でもよくなることは至て分り易ひことなり、即ち生まの馬鈴薯と煮たの、或は小麥粉とパンとを比較すれば料理するに依り如何に食物をよくするやを知るべし、又料理すれば消化し易くなると云ふことも説明するまでもなし。

料理の巧拙は消化の難易に關はる

茲に特別に食物の料理方と申す題を設けたる譯は啻に料理した食物は生まの食物より消化し易きと云ふばかりでなく、同じ料理したる食物にても料理方の巧拙に依て消化の難易あるゆゑなり。

熱帶地方の人民は唯植物性の食物のみにても生活し得れども、温帶寒帶に住する人間は唯植物ばかりにては立ち徃き難し、肉食は必要なり、然し爰に困難と申すは肉類は何れの國に到るも野菜類より高價以て、貧しき生計の人は充分に肉食したくも出來ぬと云ふことあり、然し料理の仕方に依つては隨分安く肉食し得べし。

肉の料理方に六種あり

肉を料理する仕方に凡そ六種あり曰く炙るなり、スチユー（永く煮出すこと）するなり、油煎るなり、蒸すなり、燒くなり、煮るなり、此六ッの仕方の中スチユーすると最も經濟なり、先ッ第一、此方法は出來るだけ肉の滋養分を失はず、第二唯だ食してはとても食し難き節或は骨多き部分も口に適ふ樣に出來るなり、然し西洋人も餘り此方は用ひず、なぜと云ふに第一時間が掛るゆゑなり、全躰スチユーと云ふは先づ肉を小片に切るか或は一塊なりに煮鍋に入れ水を適宜に注ぎ餘り烈しくない火に掛け段々と火度を強くし一時間或は二時間して漸く沸騰點に達せしむるなり、沸騰點に留め置くべき時間は通例肉一斤に就て一時間なり、尤も此間水なくなるときは更に注ぎ入るべし、スチユーと申す料理法に使ふ肉の分量は固より一定ならず、適宜に見計つて宜し。

スチユー尤も經濟の煮方なり

ソツプ

ソツプの製法は御存じの通り充分火に掛けて養分を取るを目的とす、ソツプに使ふ肉は或は羊の片足或は牛の頰、或は牛の肉の骨のまゝ少さく碎いて用ゆることあり、或は全く野菜ばかりより中々養分あるソツプを取ることあり、ソツプの製法などは色々あれども其向の書物もあることなれば今茲に悉しくは申さず、通例骨或は肉を蓋ある錻鍋或は土鍋に入れ、多量の水と共に除々と煮るなり、ソツプの濃きものは冷へるとドロ〳〵になるべし、一時に多量のソツプを取りたるときは、入用だけ鍋に移し葱、人參、蕪菁或は其他の野菜を細かく切りて胡椒、或は鹽を入れて風味をつけ食卓に供ふべし、若しソツプを濃くせんと思はゞ米或は豆の少量を加ふべし、ソツプは又た人參蕪菁葱などより矢張り骨や肉よりソツプを取る法を用ひて取ることを得べし、之れには濃き肉ソツプを少し加ふるときは風味大に宜ろし。

サテ右の如くすれば少しは手數は掛れども滋養になるソツプを餘り費用要らずに製することを得べし。

或人は煮ると食物を却てわるくすると云ふ、なるほど煮ると食物中の滋養分なる蛋白質を凝結せし

煮方に依て味を損す

むるゆゑ幾分か不消化になるなり、例へば牛乳を温めたるとき白き一層の皮の如きもの表面に浮むは則はち牛乳の蛋白質の凝結せしものなり。

馬鈴薯なども煮方によつて大に味を損ず、若し皮をむき初めより水に入れて煮るときは味を失すべし、一番よき煮方は唯土をさり沸騰したる鍋の中に僅か二三分入れ其儘鍋を火の側に凡そ四十五分も置くべし、斯くして料理したる馬鈴薯は初めから皮をむき冷水から煮たるものより風味は勿論大に滋養分あり、馬鈴薯は全躰滋養分あり、且つ價もあまり貴からず、日本にて近來大分食膳に上る樣になりたるは賀すべきことなり、其料理方を見るに多く前の仕方なるが後の仕方を用ゐられなば同じ品物にても甘く食べることを得べし。

肉を煮るにも同じ理なり、初めより肉を鍋に入れ置くときは肉の滋養分は大概出で去りて肉は却て殘滓の如きものとならん、先づ鍋中の湯を煮たゝせ十五分も肉を入れ置き前の如く火の側にて充分煮ゆるまで置くべし、然るときははじめの温度にて肉の上部の蛋白質凝まりて薄皮の如きものを作り內部の甘き液を外に出さぬゆゑ、滋養にもなり口にも甘し。

ビフテキ

肉を燒は所謂ビフテキの料理方なり、然れども亦た前に述べし理にて先づ鍋を充分温ためバタ或は牛脂をひき一先づ肉を投じ少しく上皮の燒けたるとき火度を緩めて燒くべし、ビフテキを料理らへるに下手にすると上面は燒け焦げ中は未だ生まなることあり、されば燒肉は尤も注意を要する料理方なり。

料理のことは別に手輕な書物も澤山あることゆゑ此くらいに留め置き少しく御娘兒がたに申したきことあり、餘の儀ならず、料理のことを輕視し給はず、よく氣を付け給はんとなり、他日一軒の家を有ち給ふとき、幸福なる家を作り給はんとならば料理などのことも決して忽視すべからず、一家の幸福と申すものは決して單純なるものに候はず、種々のもの集て形づくるものにて、食物も其中の一要部を占め居れり、一皿のソップ、一片のビフテキ良人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兩親の合性は兒子の壽命に大關係あり

ねて杖をもつかずに買物に出掛ると云ふ樣ある人あるを、是れ則ち活力と活粘力と大よ相違する點なりとす。

サテ學者の數拾年間の經驗により、又た吾人の僅少ばかりの經驗に據つても、眞に小兒に活粘力を與へんには其父母たるものが形躰上に於て充分の合性の人たらざる可らざることを知るあり、小兒に活力あると否とは其母が小兒を懷胎したる時兩親の健康に申分なきや否やにて定る、假令へ合性の點より見れば實に不滿足極まると申すべき夫婦にても、男精と女卵と結び付きたるとき、夫妻とも身躰に別條あければ生れたる兒は活力に富み見掛は誠に强健なるべし、されど若し兩親が合性でなければ其兒は長命すべしとは保證し難し、之に反して病身なる兩親にても性の合ひたる人なれば其兒は必らず長命ならん、然れども懷胎の時分夫婦特別に何か病氣に罹り居りたるときは、其子は先づ一生涯病身になるべし以上の譯合なれば健康なる兩親あれども合性なければ其子は長命せず、夫婦とも病身なれども性の合ひたる伉儷あれば其兒は長命ならん、勿論皆な悉く然りと申すにはあらず、合性あらざる兩親の子にても衞生法を守りて長命したるもあらん、兩親は申し分なき合性の人なりしが其兒自身の不養生のため夭死せし例もあらん、されどもそれらは例外と申すべきのみ。

兩親の合性なると否とは實に其子の壽命に大關係あることなれば願はくは年少婚嫁に近き男女の方々、努々此點を疎かにし給ふな、諸君が最愛の兒子の壽命の長短に關はることなれば注意し給はずば兒に對して不仁の罪に陷ゐり給はん、米國などにては前にも申したる通り、金錢の婚姻、容姿の婚姻、學問の婚姻などが澤山ある上に、無暗に婚姻するものゝなしとも申し難ければパウエル君の說に依るに米國の夫婦の七分の五は多少性の合はぬ婚姻なりそれが爲め大に癲狂院或は弱き小兒を養育する塲所を增し又小兒の、死者を加へたり、一千八百五十九年の一年間のみにてもニユーヨークだけにて死兒の數は生兒の數より多こと三百七十四

人の性は變ずるとあり

坂橋守君と串野はつ孃

人ありし、此原因は疑ひもなき同府にて合性に不注意ある婚姻の多かりしを示すなり。

玆に一の困難あり、そは夫妻婚姻の當時に於ては合性は申分なかりしが、五年を經ち十年を過ぐる中、或る事情により夫か若くは妻か、或は夫婦とも其性に變化を來し遂に不合性の夫婦となりたるときなり、一夫多妻の風の行はるゝ國、妻を見ると下女の如く、氣に叶わぬは何時でも取換る、天下に女人は多かるぞと云ふ不心得の夫多き野蠻未開の國に於ては此困難は直ちに防ぐことを得べし、曰く早く妻を離縁して、新しく娶るなり若しくば夫に暇を乞ふて他に嫁ぐなり、一夫一妻の良風俗行はるゝ國柄にあッては餘程面倒なれども全く避け難き困難にもあらず、少しく此點を研究すべし。

玆に板橋守と云ふ紳士あり、身躰を見るに先づ多血質の人あり、串野はつ孃を相知りたり、交際すると數月、戀愛の花結んで目出度夫妻となれり、はつ孃は多血無色液質の複性にして俗に云ふフトッタたちなり、最初に於ては申分なき伉儷なりしが年を經るか或は種々の事情に依り合性を破るとあり、例へは板橋君妻を迎へて後、すると爲す事思ふ圖にあたり漸くにして富有の身となり、自づから安逸驕奢に暮すより、其身躰に大に無色液を生じたり、是に於て夫妻同性となり合性の理に適はず、或は良人には少しも變化なかりしが、はつ孃板橋夫人となりしより良人非常に世途の艱難を嘗められ、共に心勞せしため無色液を失ない良人と同性の身躰となれり、サテ右二の場合は何れにしても合性を失ひたるゆえ、其後生れたる小兒は必らず活貼力を欠くならん、又た宗紀之助君あり、胸廣く丈高く痩形にて所謂膽汁質の人なり、

宗君と廣波孃

廣波たか孃を娶る、孃は純粹の無色液質にして俗に云ふブラ〳〵して間き婦人なり、尤もよき合性なりしが、良人紀之助君商店の支配人とあり殊の外心思を使用したる所より額の邊に少し變化を來し、膽汁質に特有なる頭の格向より段々と頭大質の傾向を生じ來たれり、是に於て夫婦とも不活質の性となりたれば所謂同性相合はずと云ふ場合に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●懸賞文募集廣告

今般本會に於て下の方法書に據り左の問題に付懸賞文募集致候條陸續明案御投寄わらんことを希望す

問題 禁酒主義を擴張するの方案

方法書

一文章は二十字詰三百五十行を超過すべからず
一文字は楷書にて詳明に記すべし
一投寄の文章は本會に於て調査し其優等なる者を撰て甲乙の二等とし甲は賞金拾圓乙は賞金五圓を贈呈すべし
一受賞の文章は之れを護國の楯に登錄すべし
一締切期限は明治二十二年五月卅一日とす
一投寄者は原稿に雅名を付し住所姓名は別紙に記して之を密封し其封表には必ず原稿に記入せし雅名を書し原稿と共に再び之を密封して本會事務所へ送付すべし
一封筒には懸賞文の三字を朱書すべし
一投寄の原稿は之を返付せざるものとす
一投寄者へは凡て優等文を登載したる護國の楯一部を贈呈すべし

石狩國札幌區南三條西二丁目十五番地

北海禁酒會事務[illegible]

交詢案内

（郵券十錢送れ　依賴する勿れ　宏細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十二　下婢　年齡廿歲より五十歲迄の基督信者を雇入度者あり

十五　召使　家内の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし[illegible]も普通學を望みたき志あるものを望む

十六　召使　小兒と小供の世話及其外家事にして家事の手助けとなる[illegible]年少なる女子を雇ひたき所あり但官員の御内なり

十七　下婢　二十歲前後の薪水の勞を取る下婢を雇ひたし[illegible]商家にて家族[illegible]仕事はひまなり月給は一圓以上

十八　下婢　年齡廿四五歲にて裁縫[illegible]及數學習字等を閑暇の節は教授[illegible]付き無給にて雇ひ入れたし但し基督信徒ならば教會ェ行く[illegible]内同行にすべし

●雇はれたき方（乙）

六　奉公　地方[illegible]學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて手入協力[illegible]學業[illegible]雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七　裁縫　年齡廿三[illegible]にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇ハれ度き者あり華族方か町家ならば大家のかたき内にて[illegible]地なら[illegible]ば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三　教師　府下[illegible]女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても[illegible]教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む

一九　召使　裁縫の教授を専にし其他女子學校等監督留守居様の者に雇れたし

二〇　裁縫　年齡十四五才にて[illegible]か或官員方の御方之内ヵ小間使に雇はれたし最も餘暇に[illegible]下げくだされば給料は不申候

二四　奉公　年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣質の生れつきにて華族か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は[illegible]圓以上に願ひたし

二五　裁縫　裁縫は正もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他[illegible]員の御内に教師に雇はれたし

●喜びのみぐみ

[illegible]男使　乙第廿七號は牛込矢來町の某所へ雇はれたり

[illegible]使　甲第十九號は先方にて雇ひ入れられたり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

●女生徒募集廣告

定期試驗を終り各級に入學を許す望の方は本月中に申込あれ學科は内外國教師數名にて和漢英其他普通學を教授す規則書望の方は郵劵二錢送附あれば是を呈す

芝區白金猿町

頌榮女學校

明治女學校新入補欠生徒募集

當校春期試驗相濟み候に付最下級を除く外各級の補欠生新入を許す有志の諸君は申込ありたき事尙ほ校則入用の仁は郵劵二錢封入御通知あれ

東京飯田町三丁目卅二番地

私立明治女學校

中島湘烟女史序
安東松二郎著

慈善叢書

貧兒の教育

定價金拾五錢
郵稅四錢

（貧兒の教育）第一章（貧兒教育の主意）第二章（教育の有無と犯罪者との關係）第三章（吾か邦普通教育の現狀）第四章（貧兒教育の方法）第五章（愛憐の美德○貴婦人令孃方に望む）第六章（結論）

同感の貴婦人令孃方並びに慈善家教育家諸君の愛讀を希望す

賣捌所　京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

發兌

四月。六日　十三日　二十日　廿七日
五月。四日　十一日　十八日　廿五日
六月。一日　八日　十五日　廿二日　廿九日
七月。六日　十三日　二十日　廿七日

定價

一册。六錢　郵稅。一錢　（但府内無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。十錢　（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町暇々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町頁明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年四月十九日印刷
明治二十二年四月二十日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,69 six mouths, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8n HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

WASON
HQ
1104
J74+

Apr. 27
1889
no. 159

女學雜誌

一册六錢　　版權所有

當府内無郵税　　各土曜日出版

明治廿二年（第百五拾九號）四月廿七日發

社説

惡風の事業、社會改良の事業

論説

女子の文學（其二）（池袋清風）

批評

紅葉山人の「色懺悔」（其二）（藤の屋）

叢話

人を知る法○國民之友第四十八號文學と自然○婢○國手百難を愈す○旅のはし（其六）（むらさき）

佳傳

ジョン、グレー姫の傳（樂卿散人譯）

小説

理想の紳士第十二回（月の舎しのぶ）

寄書

女學雜誌第百五十七號寄書欄内「胸の鏡」道德法律關係疑問に答ふ（佐々木笑受郎）

新報

行啓○不純潔の言行意思、不純潔に對するの言行意思○數百年來の家業を擲うつ○學校生徒の煙草○舞踏會解散○氣槪主義と濟女論○昨年やストライキの儀鐘なりし○文秀女王殿下○其他數件

外報

婚姻世話婦○ブース夫人○アメリカのフレーベル○サンドハースト夫人○廢娼會

小供談

不親切なる馬の話（寫規子譯）

附録

百人一首講義○女子本讀○婚姻説

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY